

二大政党制に懸けた20年

中道改革連合へ入党せず 無所属での挑戦を決意した背景

2月8日に行われた衆議院議員選挙の直前に、立憲民主党は、公明党と新党、中道改革連合を結党しました。ほとんどの立憲議員が中道に入党して選挙に臨む中、茨城6区の青山大人氏は、ただ一人、無所属で出馬しました。

圧倒的不利な状況の中、10万4844票を獲得したものの、自民党候補者に約2500票届かず、惜敗。敗れはしたものの、政治家としての信念を貫いたその姿勢は、全国の有権者の心を動かしました。その決断に籠められた思いを伺いました。

新党の立ち上げは有権者が求め 自分がしたい政治かと自問

——年明け1月12日に開催した、本誌の創刊50周年記念祝賀会に出席下さり、「今、解散報道が出ています」と挨拶の

中で言われていました。そこから怒涛の日々でしたね。

青山 振り返ると、1月9日に、読売新聞が「衆議院解散」と報じました。その後、週末を挟んで、1月14日に、立憲民主党（以下、立憲）と公明党が新

党を結成することを複数のメディアが報じました。1月16日に、正式に、中道改革連合（以下、中道）が発足します。

——立憲の議員の皆さんも、新党の結成については全く聞かされていなかったのですか？

青山 全くなかったです。1月15日に、立憲の両院議員総会がありました。新

党結成が既定路線のアリバイ作りの場のようなでした。

その総会で、立憲民主党の衆議院議員は、1月20日までに全員離党して、中道で出馬するか、無所属で出るか、2つに1つを決めなければいけないと告げられました。16、17、18日と非常に悩みました。

青山大人 (あおやま やまと)

1979年1月24日茨城県土浦市生まれ。土浦一高卒。慶大経卒。2006年、茨城県議選当選(その後2期務める)。衆院選当選3回。衆議院文部科学委員会理事、立憲民主党青年局長など務める。中小企業経営者。二児(8歳と6歳)の父。

——中道が結成されるという話を、どのように受け止められましたか？

青山 正直に言えば、「あり得ない」と思いました。2017年、小池百合子さんが作った希望の党に当時の民進党が後から加わって失敗、2021年、共産党と選挙協力し、「立憲共産党」と揶揄され失敗しました。今回は「またか」という思いでしたね。

——そこから、無所属での出馬を決意するまでどのようなことを考えましたか？

青山 選挙間近になって、党の名前を壊して、新党を立ち上げることが、有権者の皆さんにどう映るのか、有権者の皆さんは本当にこれを求めているのか、そして、何より自分自身がこういう政治をやりたいのかと自問しました。

2018年に初当選させてもらってから、選挙毎に約10万票の付託を受けて、皆さんの代表として国会に送り出してもらいました。この議席は自分の物でもなんでもありません。そう考えた時、「ここで中道に入るの違う」と思いました。

立憲がどんなに逆風に立たされていようとも、野党第一党として148の



落選後も、これまでと同様に、毎日地元の駅頭に立つ青山氏。選挙後は、激励や握手を求められる方が増えたとのこと。

議席があったわけですから、堂々と立憲民主党として選挙を戦うべきだったと思います。私は、初めから立憲民主党を背負って挑戦しようという覚悟で、チラシも全部準備していました。

——無所属での挑戦が全国ニュースで取り上げられました。

青山 立憲の衆議院議員148人の内、2人が引退され、146人中、原口一博さんと私だけが中道に入りませんでした。おそらく、多くの方は、「原口さんは知っているけど、茨城の青山って誰？」と思ったはずですよ。

無所属の決断をしたのは、目立つための奇策でも何でもなく、党本部から「中道でも無所属でもどちらでも良い」と言われたので、熟慮の結果、無所属を選びました。特に、党に反旗を翻したわけでもありません。しかし、結果的に、それがたまたま私しかいなかったことで注目されました。

——どのような声が届きましたか？

青山 全国から応援のメッセージを本当にたくさん頂きました。SNSや事務所への電話など、一部には、「気持は分かるけれど、実際の選挙を考えた場

合、組織にいたほうが良いのでは？」と心配して下さる声もありましたが、9割9分は、私の決断に賛同し、応援して下さった声でした。それは私自身、驚きでした。

——実際に無所属で選挙に出馬すると、政党から公認を得て出馬するのと比べて不利になる点も多いと聞きます。

青山 まず選挙期間中に配れる選挙ハガキの上限枚数が、無所属だと3万5000枚ですが、政党から公認を得ると、5万5000枚に増えます。チラシも無所属は7万枚で、公認候補は11万枚まで配れます。

それ以外でも、候補者の名前や顔の入っていない所属政党のマニフェストはいくらでも配れます。特に、今回、自民党の候補者は、高市さんの顔が入った自民党のマニフェストをたくさん配ったと思います。

ネット上に、選挙期間中も政党の広告が出せるので、スマホを開けば、高市さんが大きく出てきます。無所属では選挙期間中のネットの有料広告が法律上禁止されているので、非常に厳しいです。勿論、政見放送もありません。

うことを今回の選挙を通して、改めて実感しました。

——結果的には、僅差で敗れました。今回の無所属での挑戦という選択を、どのように感じますか？

青山 結果的に負けてしまいましたが、今回の選択に間違いはなかったと自信を持って言えます。思いもよらないほどの応援を頂いたこともそうですが、2人の子どもを持つ親としても、子ども達に胸を張れる決断ができたと思っています。

——10年以上前、当時茨城県議会議員だった青山さんを取材した際、「二大政党制を作りたい」と言われていました。それが政治家としての大事な信念だったと思います。

青山 その通りです。まさに、その思いで20年間、民主党に所属してやってきました。それがこんな形で民主党の形が無くなってしまったことは、本当に残念です。

二大政党制は目的ではなく、あくまでこの国に住む人が幸せに、豊かに、そして平和に暮らすための民主的な手法として最善の道という信念で、二大政党制にこだわってきました。

人生の中でたまにやって来る 行く末を決める際、どう選択

——そもそも、立憲が支持率を落とした要因はどのようところにあったのでしょうか？

青山 「批判の政党」というイメージがついてしまったことは大きかったです。マスメディアもその部分だけを切り取ります。見方によって、与党を批判している姿は注目されますが、注目されるのはその瞬間だけです。結局、自分達が何をしたい政党なのか、はっきりさせられなかったことが良くなかったと思います。

さらに遡れば、2017年に民進党が、希望の党と立憲民主党に分かれた時点で、民主党は既に終わってしまっていたかもしれません。

——それを期に、国民民主党と立憲民主党に枝分かれしました。

青山 それ以降、国民民主党と立憲民主党が、再び一つになれなかったのは、主にエネルギー、安全保障、憲法観の問題に対する方向性が合わなかったからです。

私は、党内ではそれらの点については

しかし、ここ数年はその実現の難しさを感じていました。これからしばらくは、自民党一強の時代がしばらく続くでしょう。日本の民主主義は大変な時代に入ると思います。

——今後についてはどのようにお考えですか？

青山 まずは青山事務所スタッフの再就職が決まり、安心していきます。党の職員の方達にも、落選後すぐにお礼に行きました。議員として日々活動できていたのは、彼らの働きがあってこそでした。

自分のことに関してはこれからですが、無所属の場合、政党からの活動費はゼロです。政治活動をどのように進めて行くかを今考えています。

ただ、政治家を諦めるつもりは毛頭ありません。次の選挙に向けて、しっかり動いて行きたいと思っています。

(聞き手 立川秀明)

青山 大人の政治活動を応援したいと思われる方は、左記のメールアドレスからご連絡下さいませようお願いします。

Mail:info@aoyamayamato.net